2023 年度　教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部　学科	職位	氏　　名
教育学部　子ども発達学科	准教授	伊藤　数馬
最終学歴	学　位	専門分野
広島大学大学院教育学研究科博士課程前期修了	教育学修士	体育科教育学、サッカー

Ⅰ　教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

学生目線に立ち、学生が主体的に学べ、且つわかりやすい教育活動の実践

【目標】

講義等や委員会活動を通して、学生に「真に信頼して事を任せうる人格」が形成できるよう教育活動を実践する。また自分のクレド「学生のために、自分ができることから最大限」を常に意識し、学生ファーストの姿勢で教育活動に取り組む。

学生が主体的な学びを実践できるよう、各教育分野で努める。特に教育方法の創意工夫、事前事後学習が必要とされる授業内容の仕組みを検討導入する。教育保育現場で生きる指導実践力を養う授業内容を展開する。

【方針】

学習内容に対する興味・関心を高め、双方向性の教育を実施する

【計画（方法）】

幼児・児童が体を動かすことを好きになる運動指導の実践を研究し、そのための理論と実践を学生に学習、理解させる。学生の主体的な取り組みを引き出すため、グループ活動等を多く取り入れたアクティブ・ラーニングや ICT 教材を導入する。

○担当科目

（前期）

保育内容（身体表現）2 クラス、幼児と健康、体育科教育法、総合演習Ⅰ、
専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）

保育内容（健康）、体育 2 クラス、専門スポーツ実習（球技）2 クラス、総合演習Ⅱ、
専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

授業内容の理解を深める工夫として、動画等視聴覚教材を活用し、ディスカッション及びグループワークを多く取り入れ、双方向型授業を実践した。また振り返りミニレポートでのやりとりを通じてフィードバックも行った。視聴覚教材の使用は、学生にとって学びやすく、授業内容の理解を深めることができるが、その後の振り返りミニレポートから考察すると、理解の浅い学生も見られたため、フィードバックの仕方等更なる工夫が必要である。ディスカッションやグループワークについても、積極的に活動できる学生とそうでない学生の 2 極化が見られたため、役割を分担する等この点についても引き続き改善していく。また、オフィスアワーにて、学生からの相談を随時受け付けている。

○作成した教科書・教材

すべての科目において、対面・オンライン時に限らず、最新時事情報を盛り込んだ補助資料を作成し活用した。

・白井克尚、今津孝次郎、伊藤龍仁、堀篤実、伊藤数馬、梶浦恭子、新實広記、橋村晴美「『サービス・ラーニング』ハンドブック」第5版、愛知東邦大学教育学部、2019年3月

○自己評価

学生の目線に立ち、授業内容が理解しやすいよう例示を多く活用し、質疑応答の機会を多くした。グループワーク等を取り入れたことや学生に対するフィードバックについては、好評であった。

また授業規律等について、一方的な指導ではなく、学生とコミュニケーションをとりながら進めるよう心掛けた。実技科目を多く担当しているため、ただ実践して終わりとするのではなく、実践した先に、各学生の考えや工夫が生まれるような仕組みを今後も継続して考え、取り組んでいく。

Ⅱ　研究活動

○研究課題

・幼児・児童を対象とした「運動遊び」「体育科授業」に関する研究
・サッカーにおける指導実践（戦術的ピリオダイゼーションに着目して）
・バルシューレ（ボールゲーム指導プログラム）に関する研究

サッカーにおける試合時のフォーメーション（配置）やボールゲームおけるオフザボール（ボールを保持していない状況）の動きに着目し、その指導方法を検討し、教育活動に生かしていく。バルシューレ（ボールゲーム指導プログラム）や戦術的ピリオダイゼーションについても研究していきたいと検討している。

○目標・計画

【目標】

研究課題をまとめたものを研究成果物として学内外に発表できるよう努める。

【計画】

・幼児児童を対象とした「運動遊び」「体育授業」に関する調査報告や先行研究を収集、考察する
・他研究課題についても、学会等で発表していく

○2016年4月から2024年3月の研究実績（特許等含む）

（著書）

・今津孝次郎、西崎有多子、白井克尚、中島弘道、新實広記、伊藤龍仁、柿原聖治、伊藤数馬「教員と保育士の養成における『サービス・ラーニング』の実践研究」唯学書房、2019年2月

（学術論文）

・伊藤数馬「領域『健康』の指導法に関する一考察　～保育実践教科書の分析を通して～」東邦学誌 第46巻 第2号 2017、2017年12月
・古市久子、矢内叔子、新實広記、伊藤数馬「保育士・教員養成課程の表現科目における共感的要素を使った教授法Ⅱ―授業実践を通して―」東邦学誌 第45巻 第2号 2016、2016年12月

（学会発表）

・大塚道太、森木吾郎、房野真也、伊藤数馬、山中亮、土田洋、梶山俊仁、山本英弘、高橋幸平「球技の『工夫したゲーム』の実態調査　その１　サッカーで実施されている指導目的と工夫の

仕方について」
日本体育・スポーツ・健康学会第 71 回大会:会場 オンライン、筑波大学、2021 年 9 月
・大塚道太、小柳竜太、森木吾郎、房野真也、伊藤数馬、山中亮、土田洋、梶山俊仁、山本英弘「ボール運動のミニ・ゲーム化が運動強度に与える影響について―競技人数の違いに着目して」日本体育学会第 70 回大会:会場 慶応義塾大学、2019 年 9 月
・大塚道太、森木吾郎、房野真也、伊藤数馬、梶山俊仁、山本英弘「ゴール型球技におけるコートの広さの違いが運動内容に与える影響―サッカーゲーム中のパス頻度に着目して」日本体育学会 第 69 回大会 徳島大学、2018 年 8 月
・大塚道太、森木吾郎、房野真也、伊藤数馬「サッカーグラウンドの広さの違いが運動強度と内容に与える影響―正規グラウンドと面積 1/2 グラウンドの比較検討―」日本運動・スポーツ科学学会 第 25 回大会 広島大学、2018 年 6 月

（特許）
特になし
（その他）
・2017 年度　授業実践優秀教員

〇科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）
特になし

〇所属学会
日本体育・スポーツ・健康学会、日本運動とスポーツ科学学会

〇自己評価
今年度について、十分な研究成果を学内外に発表することができなかったが、次年度は研究成果を発表する機会を増やしていきたいと考える。

Ⅲ　大学運営

〇目標・計画
【目標】
大学・学部における校務および委員会の活動を積極的かつ円滑に行う。
【計画】
（全学）・学生委員会　・FD・SD 委員会　・幼小教職課程・保育士養成部会
（学部）・ガイダンス　・大学祭　・教職合宿　・介護等体験実習　・施設等実習
（ＷＧ）・強化指定クラブ支援　・次世代教室プロジェクト

〇学内委員等

〇自己評価
FD・SD 委員会委員として、全学 FD 研修の内容を検討・実施し、授業評価アンケートの実施や今後の活用方法についても検討した。
また学生委員会委員として、課外活動に関する事項に対し尽力することができた。学生会については、毎月の定例会に出席し、大学祭や卒業記念行事等の企画・運営等、助言を行った。
学部での分掌については、介護等体験実習の運営、施設等実習副担当、入学生・在学生ガイダンスの企画運営を担当した。

Ⅳ　社会貢献

○目標・計画

【目標】

地域に根ざした大学・学部であるよう社会貢献活動に積極的に参加する。

【計画】

教育学部の教育活動（サービス・ラーニング等）を通した地域貢献事業やボール遊び・サッカーを媒体とした地域貢献活動を企画・実践する。

○学会活動等

・愛知東邦大学地域創造研究所所員

・東海大学女子サッカー連盟常任理事

○地域連携・社会貢献等

2023 年度高大連携授業　講師「運動好きな子どもを育てるためには」(2024 年 2 月)

TOHO SUMMER SCHOOL　「ボール遊び」講師（2022 年 8 月）

第 33 回愛知サマーセミナー　講師「幼児期における運動の大切さとは」(2023 年 7 月)

○自己評価

今年度について、東邦高校との高大連携事業の一環として、「幼児児童の運動遊び・ボール遊び・体力低下問題」に関する講座を担当し、講義を行った。

Ⅴ　その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学会交流、自己研鑽等）

女子サッカー部部長として、東海地域の大学女子サッカー発展、また女子サッカーの環境改善、普及活動に尽力することで自己研鑽したいと考えている。

Ⅵ　総括

2023 年度について、これまでの経験を生かした教育研究活動を行うことができ、概ね十分な取り組みができたと考えている。

研究面における今後の課題として、継続している共同研究に加え、幼児児童を対象としたボール遊びプログラム「バルシューレ」についての研究など、研究成果を学内外に発表する機会を増やし、幼児児童を対象とした「ボール遊び」教室等、実践する機会を増やしていきたい。

教育面に関しては、今後も学生の目線に立つことを忘れず、授業満足度を高め、学習内容の理解を深めることができる授業実践を心掛けていく。

また学生会活動の活性化や女子サッカー部の強化についても尽力していきたい。

以　上